



町民文芸

只見短歌会

十一月詠草

大塚栄一

指導

大根を台車に積みて運ぶ道コスモス群れゐて心なごむも

馬場 八智

年毎に忘れ多しと言ふわれに大人の証と友は明るし

目黒 富子

オレンジの風船透かし外を見る孫は夕焼けみたいとはしゃぐ

新国由紀子

紅葉も終りて秋遠なりしかと思ひし今朝は初雪の降る

関谷登美子

病院の静もる深夜に看護師の廊下見廻る靴音響く

渡部ゆき子

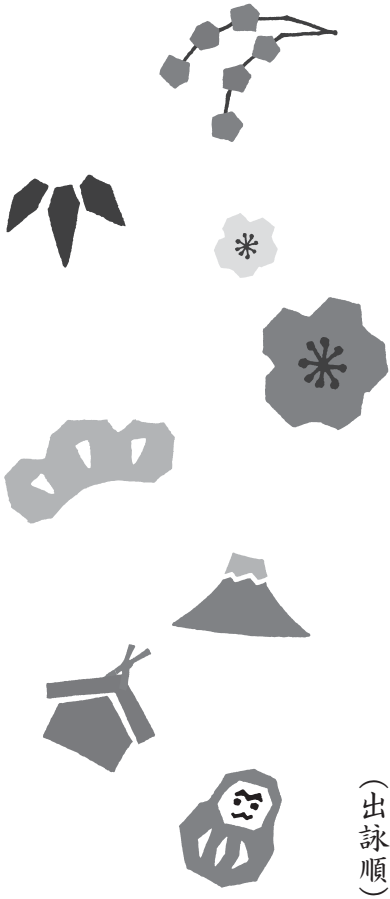
取り残す黄色や緑の白菜は花のごとくに冬畑はたに映ゆ

渡部ヨリ子

認知症の人多き苑の介護士ら幼に物言ふごとくにやさし

新国 洋子

(出詠順)



只見俳句会

十二月例会

目黒十一

指導

嬰鑠や百一歳の初詣
恙無く屠蘇を酌みけり四世代

吉 児

やや重く五年連用日記買う
師走とて許すことなく訃報かな

幸 生

片すみに覚え書きする秋仕舞
野も山も庭の敷石冬近し

都

早朝の窓を横切初鴨来
数へ日や松本清張読み終えて

味代子

愚痴ひとつ菜漬の石の重さかな
たわいなき夫にさからい悴みて

弘 子

浅漬の酢のはしりたる初昔
終活の話へたどる炬燵かな

礼

電子音夫の熱爛丁度よし
食細くなりても美味し冬至南瓜

一 穂

若さとは素晴らしきもの冬木立
冬の海朽ちたる店の昔かな

修 一

ひゆうひゆうと背戸を揺らす雪女郎
古文書に先祖を辿る冬の夜

信

妻の留守口ふさぐかに北塞ぐ
どの道も一時停止や十二月

恒 夫

